

(付記) 若干予想して、たゞ横川には見ると  
きものは多くなかつた。それと補つて余り  
あるものは予後、赤木に見せておつた。こ  
れはマイクログラスあつたれば、それで、混血  
の御振動なくしては全く叶わなかつたとい  
ふつた。

赤木谷の見送ればじめておつた会費、  
一方ではいかゞ感して来たのか。  
長田会長は近親に御不幸あり、お茶加が  
なかつたが、何かと御配慮を頂いた。又  
御案内役で、御表示を頂いた山下、御共、我  
元御中の瑞氏、外地元教人、一方、御親  
切に感謝申上げる次第である。

尚三日ほど経つと、山下氏から「横川八景」  
のプリントを送つて来たので、次に掲げる。

資料

横川八景

拱張 山下貞男

過日は御及御様で、左、由帝者各位に  
おつての時に御配付下さい。  
少しオーバーですが、スケールの小さいな  
りに横川の印象を表現していると思ひ  
ます。

横川八景 読人不和

月形の秋月

旅人の杖やとらめん月形の

橋のなごさの秋の夜の月

大津留の落雁

大づるの田毎に落つるかりか奴は

ゆたけき御世と寝るふなるらん

東の晚鐘

左も水と告がる東の鐘の音に  
家居とさして帰る私人

後持岡の夕照り

菊穂千すもちの岡の夕日照り  
いすも同じ秋の東にけり

尾上沖の夜雨

妻恋する尾の上の夜を聞く時日  
沖のねざめと破る村雨

大石の晴嵐

大石の砕くる音の山嵐  
梢のもしも早や古りにけり

井取の暮雪

弓とりにあらで井取の山道さ  
踏みなやみたる夕暮のゆき

羽木の帰帆

真帆かけし小川の舟とに船越の  
波寄の陸にかなる稲舟

研橋記

養賢寺の墓地について

上月十日(主遊)午後二時、四書館で

こは墓地を歩けばすておつたが、書道前  
から雨になつた。小降り、時もおつたが、歩け  
た草かぬいているので、下半身はすぶぬれに  
なつた。室内研橋に切りがえる。集つたものは  
高木、高野、藤矢、佐藤、河辺、緑石、羽柴、

の七人、それ以上湖の山本氏土ほしに頼るお見  
せに打る。

まず机上で養賢寺墓地について。幸い、現地に  
くわしい伝説があり、新野、羽柴、何彦が  
足と運んでいって、毛利家の墓所の周りに  
高いとミミまで、且り、戸倉西名、岡次、黄川山  
口など、家中の名家、松平、羽柴、高妻とい  
つた学者、そして、羽柴町、今も残る新家の  
墓所と次々と話し出す。思しは、現地に  
歩き、並梅墓を見んことには、どうもヒンと来ぬ。  
天気よよい日に又持ちなすこととした。

話題はつい数日前の直川行きのことに及び、月  
形、落領標柱のこと、上揚の横川八景のこと、  
村切神社のことから、天神社、怨霊神と諸氏展  
開する。

人数が七人で、小じんまりした会合、これ幸いと  
落政時代の庶民史料、古文書、数通と羽柴は  
机上に出して、みんなの献詩にゆだねる。死んだ  
青木会員、奥の「船渡手形」、昔屋市の海子会  
員か、これ「泥谷村の栄史文書」野津町の安藤一  
馬氏より頂いた「津久見村人別段手形」数通、そ  
して、安藤日向市の御生、秋仙氏より頂いた「牛馬一取  
扱の旅書」と、どれも昔の人達の生活と縁す  
るもので、次々とそれはいくつかの挿話を引き出し  
て、賑やかな研究会となる。

この種の室内史談会は、場所とひまさえあれば  
ば、度々催したいもの、人数は少なくてもよい。旅談  
資料を土古よりで、定例的にやりないうちである  
と感した。式々個人としての研究も怠つてはな  
らないが、二三人がよい、一しよに歩く、集つて話  
し合う、そして会の方で、何か社会への奉仕活  
動とする。そんな風にありたいと思つた。

而は更にほげしくなる。午後四時半散会。

(おあり)